

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻
英語教授学領域
トーネ トッド

【論文題目】

Adaptation, Analysis and Critique of Four Psychometric Instruments into the Japanese Context to Measure University Students' Causal Perceptions for Success and Failure in Second Language Acquisition (SLA)

(第二言語習得の成功と失敗に対する大学生の因果的認識を測定するための4つの心理測定用具の日本のコンテクストへの適用、分析及び批評)

【授与する学位の種類】 博士(文学)

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、「帰属理論」(attribution theory: ひとが自らの行動や結果(成功や失敗など)の原因がどのようなことにあると推測するのか、その傾向について理論化したもの)に基づき、日本の英語教育に対して妥当性と信頼性のある測定ツール(アンケート)を提案することを目的としている。そのために、特に日本において応用の可能性が高いと予測される4つの測定ツール、つまり the Causal Dimension Scale II (CDS II), the Critical Incident Attribution Scale (CIAM), the Sydney Attribution Scale (SAS), the Survey of Achievement Responsibility (SOAR) を研究対象とし、それぞれについて緻密な実証的研究を行っている。

「文献研究」の章では、帰属理論の理論的背景への考察、また CDS II, CIAM, SAS, SOAR それぞれに対する評価を、先行する理論的および実証的研究を比較検討しながら行っている。被験者の能力(ability)、努力(effort)、(学習課題やテストに取り組む上での)幸運(luck)、またタスクの難易度(task ease/difficulty)という4つの要因が、測定ツール(アンケート)から得られる解析結果を検討し、被験者の将来の学習の成否などを予測するために有用であるとまとめ、本研究の意義を明確にしている。

「方法」の章では、まずデータ解析のために使用する統計(検定)と本論文での考え方(尖度、歪度、クロンバックの α 、検証的因子分析)が述べられている。オリジナル版測定ツール(アンケート)が英語で作成されているため、各測定ツール(アンケート)について妥当性の高い日本語版を開発する必要があり、その手順(forward and back translation)が報告され、日本語版(一部修正)が英語版との同質性が十分であり、日本語版は適切な測定ツール(アンケート)であると結論付けられている。なお、各実証研究への参加者(西日本の4つの大学に在学する大学生)は、CDS II(9段階意味差別法、12項目)が213名、縮約版CIAM(6段階リッカート尺度、48項目)が579名、修正版SAS(5段階リッカート尺度、36項目)が439名、そしてSOAR(6段階リッカート尺度、64項目)が654名であった。

「結果」の章では、CDS II, CIAM, SAS, SOAR それぞれについて、記述統計量の解析(データ分布の尖度、歪度)、信頼性の検定、そして検証的因子分析結果が報告されている。解析結果から、CDS II 及び CIAM は適合度が十分あることが確認された。一方、SAS 及び SOAR は十分な適合度があるとは言えないことが判明した。

「考察」の章では、「結果」で得られた4つの測定ツール(アンケート)の特徴(顕著なアンケート項目結果の個別的検討を含む)が、歪度や信頼性係数の閾値などから議論されている。また、日本語版で十分な適合度があるとは言えなかったSAS 及び SOAR について、継続的な研究の必要性を指摘している。

「結論」の章では、本研究の重要性と成果がまとめられ、併せて本研究の課題と今後の研究の方向

性が述べられている。

本論文は、構成・論旨は明晰であるとともに、CDS II 及び CIAM という2つの測定ツールが日本の英語教育に導入の意義があることを実証的に明らかにした意義は高く評価できる。

以上のことから、本論文が博士（文学）の学位を授与するための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成25年1月16日（水）に、審査委員会委員5名の出席のもとに実施された。まず、本人から研究の学問的意義・位置付け、方法、主な成果の概要が英語で発表された。引き続き、口頭試問が行われた。本人は、審査委員から出されたすべての質問に適切かつ十分に答えることができ、本人が博士論文で対象とした研究分野や関連領域、また研究手法や得られた結果について十分な専門的知識と理解を持つことが確認された。申請された学位論文が博士の学位の授与に値する水準にあると、審査委員全員の意見が一致した。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査 アイズマンガー イアン

委員 山下 徹

委員 ラスカウスキー テリー

委員 折田 充

委員 サガズ ミシェル